

「実践報告」

## 通常学級における漢字学習の指導と支援

### — 気になる児童に着目して —

山科 理穂（長崎大学大学院教育学研究科教職実践専攻）  
吉田 ゆり（長崎大学教育学部）  
内野 成美（長崎大学大学院教育学研究科）

キーワード 通常学級、漢字の学習

#### 研究の背景

小学校学習指導要領解説国語編（2008）では、文字に関する事項として、漢字の読み書きや使い方に関する事項があり、学年別に学習する漢字が配当されている。その配当漢字を読み、漸次書き、文や文章の中で使うこととされている。また、中・佐藤・大山・小池（2016）は、学年を修了するまでに、前の学年に配当された漢字を確実に書くことが困難な児童が多く存在していると述べている。漢字の読み書きの習得に関する総合初等教育研究所の調査（2005）の結果によれば、学年修了時の書きに関しては、1・2年字（1年生・2年生でそれぞれ学習する漢字）以外は十分に定着しているとは言えない状況である。このことから、中学年以降に学習する漢字の書字については、十分に習得できていない児童が多く存在することが推測できる。

また、登米教育研究所（2004）の漢字学習に関する児童生徒の意識調査では、漢字学習を好きと答えた児童が、第2・3学年と比べると、第4学年で減少しており、配当漢字が第3学年の200字に加えて新しく200字追加されることや、画数の多い漢字が多くなることから、苦手意識を感じ始める児童がいることを示唆している。

文部科学省「通常学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」（2012）によれば、通常学級には知的発達に遅れはないものの学習面又は行動面で著しい困難を示す児童が6.5%の割合で在籍していると示している。このような支援を必要とする児童を含め、多様な児童が在籍する学級で、繰り返し書くことのみでの学習や、児童の自主学習に任せきってしまうと、漢字の学習が嫌になったり、漢字を書くことや使うことに苦手意識をもってしまう可能性がある。

そこで、十分に漢字習得ができていない児童が存在し、かつ苦手意識を感じ始めることが推測される中学年段階において、多様な児童が在籍する学級での効果的な漢字の指導と支援方法の検討が必要であると考えられる。

本研究では、通常学級に在籍する小学3年生を対象とし、漢字学習につまずきのある児童に着目した漢字の指導と支援の効果について検討することを目的とする。さらに、漢字学習につまずきのある児童に着目した指導・支援を通常学級で実践していく中で、全体への支援の広がりにも目を向け、授業で行うことのできる指導の配慮や工夫、教材について検討し、クラスワイドの指導・支援について考察をする。また、漢字の学習につまずきのある児童とは、学習した漢字が読めない又は書けないことによって、漢字に苦手意識をもってしまい、積極的に漢字学習に取り組む様子が見られず、授業の参加や学習内容の習得において困難がある児童（以下気になる児童）とする。

## 方法

- 1) 対象 X市立Y小学校3年Z組34名（男子17名、女子17名）
- 2) 時期 2017年5月～2017年11月の期間（計20日間）
- 3) 実践研究の目的 通常学級に在籍する気になる児童が、学習に参加し、「わかる」「できる」と感じることができ授業と短学習を行い、学級全体と気になる児童にとっての効果的な指導・支援方法の検討を目的とする。
- 4) 実態把握 漢字の学習についてのアンケート（5月、11月実施）、2学年の漢字テスト（6月実施）、漢字テスト（6月、11月実施）、学級担任へのインタビュー、授業中や書字の様子等行動観察

### ①学級の実態

#### ・漢字の学習についてのアンケート（5月実施）

表1 漢字の学習についてのアンケート

漢字の学習についてのアンケート(事前)	あてはまる	どちらかというあてはまる	どちらかというあてはまらない	あてはまらない
①漢字の学習は好きですか。	19	11	3	1
②音段、漢字を使おうとしていますか。	10	16	7	1
③漢字を覚えることは必要だと思いますか。	30	3	0	1
④たくさんの漢字を書けるようになりたいと思いますか。	25	6	2	0
⑤漢字を正しく使うことに自信はありますか。	17	10	5	2

(人)

まず、漢字学習についてのアンケートによると「漢字の学習が好き」「どちらか」というと好き」と答えた児童が30人いた。学級全体で見ると、漢字学習に苦手意識のある児童は少ないと言える。③「漢字を覚えることは必要だと思う」児童は30人、「どちらかという必要だと思う」児童は3人、④「たくさんの漢字を書けるようになりたいと思う」児童は25人、「どちらかというと思う」6人で、多くの児童が漢字は必要であると思っており、書けるようになりたいと思っことが分かった。そのほか、⑦「漢字を覚えるために工夫していることはありますか。」では、「たくさん書く」19人、「声に出して読む」12人、「指でなぞり書きをする」17人、「見て覚える」17人、「大きく書く」11人、「その他」12人という結果だった。特にかたよりはなく、児童それぞれが様々な方法で漢字を学習していることがわかった。「その他」は「丁寧に書く。」「漢字表を活用する。」「漢字の

形に気をつけて正しく書く」等があった。

#### ・漢字テスト（6月実施）

6月に実施した2学年の漢字テストの平均点は4.4点(6点満点)、漢字のプレテストの学級の平均点は17.9点(20点満点)だった。テストの漢字は2年生で学習するもので、普段の生活でよく使ったり、見たりする漢字が多いので、児童らは特に難しいと感じている様子はなかった。また、この漢字テストでの児童の誤答を、形態、音韻が類似しているかどうかなどで宮内(2008)を参考に、下記のように分類した。漢字テストでの正答以外の回答は全て誤答とした。

表2 誤答分類の種類と数

誤答分類			2年生の漢字	プレテスト
a	無答	何も書かなかった	14	18
b	似字他字	似ている他の字	4	0
c	同音他字	読み方が同じ他の字	13	2
d	他字その他	関連性のない他の字	9	13
e	不完全誤字	一部分不完全な誤字、一部分のみ一致している誤字	4	22
f	誤配置誤字	一部分の配置を誤った誤字	0	5
g	誤字その他	関連性のない誤字	3	4

2回の漢字テストの児童の誤答を分類すると、表2のような結果になった。最も数の多かった無答に続いて、誤答数が多かった同音他字13問については、「電池」の問題で「電地」と書いている児童が13人いたためである。次に多い、他字その他9問は、「雲」を雨冠が共通している「雪」と書いたり、構成や意味が似ている「空」と回答している児童が数名いた。漢字のプレテストでは、不完全誤字22問と無答18問の2つが多く、不完全誤字については、漢字の大体部分はあっているが、「耳」「赤」「男」などの漢字で、線がはみ出していたり、とめ、はね、はらいの部分に誤りがある字が多かった。

#### ②気になる児童の実態

プレテストとミニテストのどちらかで、5割以下の点数を獲得した児童6名(児童A, 児童B, 児童C, 児童D, 児童E,)と、学級担任が漢字の学習において支援が必要であると判断した1名(児童A)、実習者の観察から2名(児童A, 児童F)の7名の気になる児童に着目し、授業実践と短学習の計画を立てて実践を行った。学級では、児童らに特別支援員や補助教員などの支援のための対策は講じられていない。次の表3の気になる児童の実態をふまえて実践を行う。

表 3 気になる児童の実態と手立て

気になる児童		
児童A	実態	テストやプリントに空欄が多い。(プレテストの誤答は、14問中13問無答。)また、漢字の読み書きのつまずきによって、音読ができなかったり、板書に多くの時間がかかることがあり、ノートに書くのをやめてしまう場面が見られた。学習中に、こまめな声掛けや、何度か板書の読み上げを行うことで、ノートをとったり、課題に取り組むことがある。
	手立て	・空欄ばかりのテストにならないよう、ヒント付プリントを作成し、まずは見て「書く」ことができるようにする。 ・授業導入場面で、本時に出てくる漢字の読みと簡単な意味を学習する。
児童B	実態	アンケートより、漢字学習に苦手意識が見られる。また「、めんどくさい」と板書を書くことをいやがったり、「僕は字が雑だから。」と自信がない発言がある。
	手立て	・「できる」と実感できる学習を行い、自信を持たせる。 ・否定的な印象があるため、漢字に慣れ親しむ機会を設定する。
児童C	実態	アンケートより、漢字の苦手意識はほとんどない。漢字練習帳では、誤字が多く見られ、その書き直しが苦手である。
	手立て	・とめやはねなどの間違いやすいポイントをあらかじめ確認し、自主学習で正しい漢字練習を促す。 ・漢字パズルやイラストなどの視覚教材の活用。
児童D	実態	丁寧に説明したり、多めに時間をとるとできることがある。漢字テストではとめとはねの誤字が見られる。
	手立て	・学習中に机間指導を行い、内容の理解ができているか個別に確認する。 ・とめやはねなどの間違いやすいポイントをあらかじめ確認し、自主学習で正しい漢字練習を促す。
児童E	実態	集中して授業に参加できる。しかし「土」と「工」など細かい部分で間違ふことがある。
	手立て	・間違いやすいポイントをあらかじめ確認し、正しい漢字を練習できるようにする。
児童F	実態	アンケートでは全て肯定的な回答で、漢字の苦手意識はない。学習では、空書きが苦手である。
	手立て	・空書き学習場面での、漢字を大きく印刷した筆順シートの活用。 ・漢字の構成に着目した学習を行い、複雑な漢字を分けて覚える。
全員	手立て	・漢字の「読み」の習得後、「書き」の練習を行う、学習の焦点化。

## 5) 授業実践

### 【国語科 新出漢字の学習】(1時間)

**ねらい** 新出漢字の読み方や筆順を知り、漢字の全体や部分の形を捉えたり、使い方を考えることで、漢字を読んだり、書いたりすることができる。

**児童の様子** 気になる児童を含め、書字運動である空書きでは、腕を大きく動かし取り組んでいる児童が多かった。筆順→読み→使い方の繰り返しの学習の流れの中に、漢字の間違いさがしクイズを提示したり、意味調べの時間をはさむことで、集中して取り組むことができている児童がいた。授業後半では、本時で学習した漢字を使ったパズルを行ったため、多くの児童が自信をもってパズルに取り組むことができていた。

### 【国語科 へんとうづくり】(2時間)

**ねらい** 1時間目は、漢字のへんとうづくりを組み合わせるパズルや、同じへんの漢字探しの活動を通して、漢字の構成を知り、へんやつくりからおおまかな漢字の意味が捉えられることに気付くことができる。2時間目は、漢字のへんとうづくりの組み合わせパズルを作成したり、操作する活動を通して、楽しみながら漢字を調べたり、考えたりすることで、漢字の構成や意味を考えることができる。

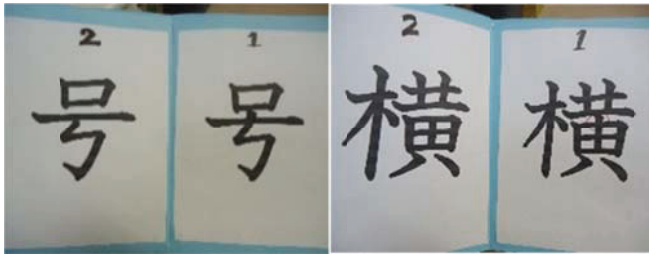


図1 漢字クイズ



図2 児童作成の漢字パズル

### 児童の様子

本単元で学習した偏は、児童にとって身近なもので、普段からよく使う漢字に使われている偏が多かったため、多くの児童が偏の表す意味を理解したり、共通する漢字を探すことができている。共通する偏の漢字探しでも、教科書の巻末を使い、「もうさんずいは調べ終わりました。」「ごんべんが終わったから、次はにんべんを数えよう。」など意欲的に取り組んでいた。単元最後の、2時間目で記入した振り返りには次のような感想があった。

**児童の感想** 漢字のパズルをもっとやりたい。/考えてへんをつくりを組み合わせさせて漢字をつくるのが面白かったです。(児童 B) /にんべんが人の体を表していることがわかりました。(児童 F) /漢字は、へんをつくりでできていることを知りました。/次はつくりの読み方も知りたいです。/わからない漢字でも(偏が分かっていると)便利。など。

## 6) 短学習実践

授業実践と合わせて、週1回の国語科の授業中、約5分間で短学習を行った。短学習は、ゲーム性のある学習や、全員が取り組めるような工夫をした学習を短い時間で定期的に行い、漢字に慣れ親しみ、「できる」を積み重ねていくことをねらいとする。

### 【今日の漢字プリント】(3回)

**ねらい** どの児童も取り組むことができ、全員が漢字を書くことができる工夫をしたプリントに取り組み、「書けた」体験を積み重ねることで、自信をつける。

**児童の感想** 「全問書けた。」「簡単だった。」「ヒントはいらないよ。でも本当は、確認のために少し見た。」

### 【フラッシュ漢字】(4回)

**ねらい** 声を出して漢字を読んだり、書いたり、漢字カードを選ぶ活動を通して、楽しみながら漢字の復習をすることで、新出漢字の定着を目指す。

**児童の様子** フラッシュ漢字の「スピード読み」では大きい声ですばやく漢字を読んでいた。また、気になる児童もリラックスして取り組んでいる様子が見られた。「漢字編」でもスライドに注目し、集中してカードを取ったり、獲得したカードをペアで確認することができていた。1人1組のカードを配ったため、漢字を見つけるのが遅い児童でもカードを獲得することができた。



## 【漢字通信】(2回)

ねらい 児童の漢字学習の成果や、漢字の豆知識などを知ること、漢字に興味をもつきっかけになる。

児童の様子 正解数の少ない漢字が書けていたことを知り、「おれ、これあった。」と喜ぶ児童がいた。自分から通信に目を通して読んでいた児童もいた。

### 結果と考察

#### 1. 漢字の学習についてのアンケート

表4 漢字の学習についてのアンケート(事後)

漢字の学習についてのアンケート(事後)	あてはまる	どちらかというにあてはまる	どちらかというにあてはまらない	あてはまらない
①漢字の学習は好きですか。	17	10	4	3
②普段、漢字を使おうとしていますか。	12	17	5	0
③漢字を覚えることは必要だと思いますか。	31	2	1	0
④たくさんの漢字を書けるようになりたいと思いますか。	29	2	2	1
⑤漢字を正しく使うことに自信はありますか。	11	11	6	6
				(人)

アンケートによると、「漢字の学習が好き」「どちらかというが好き」な児童は、事前30人、事後27人と学級の半数以上であり、特に変化は見られなかった。事後の「嫌い」と回答した3人のうちの2人は気になる児童Aと児童Fであり、両者とも事前の「好き」という回答からの変化だった。もうひとは、「どちらかという嫌い」から「嫌い」への変化だった。学級全体で見ると漢字学習が好きな児童がほとんどだが、漢字に苦手意識のある児童が現れ始めていることがわかった。「普段漢字を使おうとしている」「どちらかというを使おうとしている」児童も事前26人、事後29人と特に変化はない。

「漢字を覚えることは必要だと思う」「どちらかというに必要だと思う」児童は、33人と変化はなく、漢字の必要性を感じている児童が多いことがわかる。事前で「思わない」と回答した1人の児童は、事後「思う」になり、漢字学習に対する意識に変化があったことが伺える。また、「たくさんの漢字を書けるようになりたいと思う」「どちらかというになりたいと思う」児童は事前事後共に31人で、変化はないが、事後ではその中でも29人が選択肢①「書けるようになりたいと思う」と回答している。学習漢字の難易度は上がっているが、児童の漢字に対する必要性や意欲は高いままであることが伺える。

⑤「漢字を正しく書くことに自信はある」児童は、17人から11人に減少した。「自信がない」4人の中には、漢字学習が好きで必要性も感じており、意欲もあるが、「自信がない」と回答した児童もいる。このことから、今までどおり漢字学習に取り組んでいるが、手応えがない、結果が返ってこないと感じている児童がいると考える。

## 2. 漢字のテスト

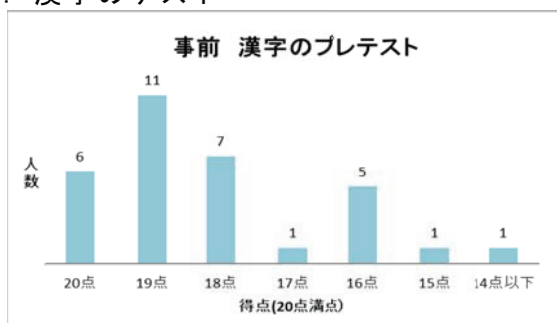


図3 漢字のプレテスト

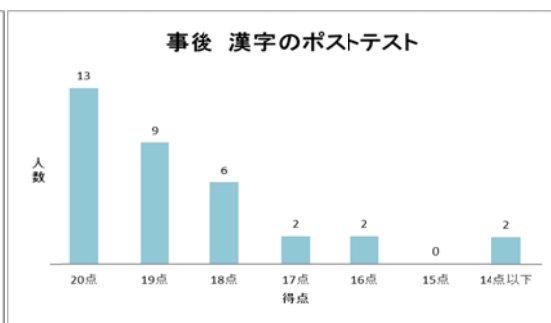


図4 漢字のポストテスト

プレテストの学級平均は17.9点、ポストテストの学級平均は18.5点だった(20点満点)。実践前と比較すると、20点満点を獲得した児童が6人から13人に増加した。また、ポストテストの誤答を分類すると、無答8問、似字他字0問、同音他字8問、他字その他7字、不完全誤字20問、誤配置誤字0問、誤字その他2問だった。実践前と比べると、同音他字の誤答は増加、似字他字は変化なし、その他の分類については誤答数が減少している。

## 3. 気になる児童の成果について

【児童 A】 事前アンケートでは「漢字の学習は好き」と回答していたが、事後「嫌い」と回答し、漢字学習に対する意識に変化があった。しかし、③「漢字は必要だと思いますか。」④「たくさんの漢字を書けるようになりたいと思いますか。」⑤「正しい漢字を書くことに自信はありますか。」では実践前後とも1あるいは2を選択しており、肯定的な意見である。漢字学習は好きではないが、漢字は必要であり、書けるようになりたいという児童の思いを大切にした指導が必要である。また、プレテストでは6点、ポストテストは14点と点数が増加した。さらに誤答分類から、無答の問題数が減少していることがわかる。「今日の漢字」プリントでも、全3回とも無答が0問であり、誤答が2問あったが、全ての問題に取り組むことができていた。まずは空欄をつくらず「書く」ことを促すために行った支援の成果である。また、印象に残り、楽しかった学習として、フラッシュ漢字「読み方編」「漢字編」の漢字カードをとる学習を挙げていた。授業の様子からも、スライドに反応し、声を出して読んだり、カードを獲得することが出来ており、漢字が苦手なA児も参加することができたからだと思われる。一方で、文をつくる課題は空欄が多かった。今後も引き続き、短学習などで漢字の基礎的な「読み」の学習を積み重ね、意味も合わせて学習することと、見て「書く」ことを続けていくことが必要だと思われる。

【児童 B】 実態把握でも述べた様に、「字、下手だから。」等の発言がみられ、ノートは書かない、書いても適当にする、というような行動が見られた。実践中には、授業中や課題途中にこまめな声掛けをし、「書く」ことに取り組んでもらった。Bが楽しかった学習は、イラスト(絵)漢字、フラッシュ漢字「読み方編」「漢

字編」の漢字カードをとる学習である。授業の様子からも視覚的な教材に注意を向け、学習に取り組むことができていた。事前・事後のアンケートで、特に変化は見られなかったが、今後も少しずつ「できる」経験を積み重ね、自信をもたせるような支援が必要であると考えた。

【児童 C】 「漢字学習はどちらかというところ好き」に回答していたが、事後では、「どちらかというところ嫌い」に変化していた。さらに「漢字を書くことに自信がある」と答えていたが、事後では「どちらかというところ自信がない」と答えている。漢字練習帳でのやり直しが多かったことや、漢字を難しいと感じる場面があったからだと思われる。しかし、プレテストは学級平均より低い 16 点だったが、ポストテストでは学級平均より高い 19 点を獲得した。

印象に残り、楽しかった学習は、へんとつくりの漢字カルタ、「今日の漢字」プリント、フラッシュ漢字「読み方編」と答えた。へんとつくりに分けて漢字を考えたり、組み合わせる学習に取り組むことができていて、フラッシュ漢字でも漢字を声に出して読み、授業に参加することができていた。まだ細かい部分の誤字が見られることがあるので、構成を利用し、分けて覚えるなど、児童が取り組みやすい学習方法を活用して、学習を進めていく必要がある。

【児童 D】 事前・事後アンケートから、漢字学習に対する意識の変化は見られなかった。「漢字を覚えるために工夫していることはありますか。」では、「繰り返し書く」「大きく書く」に加え、事後「指でなぞり書き」「見て覚える」でも練習しており、学習方法が増えたことがわかった。漢字のプレテストは 17 点、ポストテストでは満点の 20 点を獲得した。

【児童 E】 事前・事後アンケートから、漢字学習に対する意識の変化は特に見られなかった。漢字のプレテストは、学級平均より低い 15 点だったが、ポストテストは満点の 20 点を獲得している。プレテストの誤答は、不完全誤字が多かったため、あらかじめ間違いやすいポイントを提示したり、大きくなぞって書くなど、細かい部分の学習を行った。また E 児は、授業内容の理解はできている様子が見られたので、今後は練習問題や活用の学習を丁寧に行うと良いと考える。その際、引き続き、ポイントを明確に示したり、大きめのお手本を表示するなどの工夫が必要だと考える。漢字学習については、「どちらかというところ好き」と回答しているので、今後も漢字学習が苦手にならないよう、予防的支援を行う必要がある。

【児童 F】 「漢字の学習が好き」から「嫌い」、「ふだん漢字を使おうとしている」から「どちらかというところしている」、「漢字の学習は必要だ」から「どちらかというところ必要でない」、「たくさんの漢字を書けるようになりたいと思う」から「思わない」、「漢字を正しく書くことに自信がどちらかというところある」から「ない」へ回答が変化しており、漢字学習に対する苦手意識がでてきたことが伺える。

考えられることとして、アンケートと行動観察から、漢字パズルを考えたり、作成したりすることが F 児にとって難しかったようだ。新出漢字のパズルを班で行った授業で、児童はパズルが 1 組も獲得できず、感想も「楽しかった」に△の



評価をつけていた。授業中の板書や、課題に取り組むことを嫌がる様子はないが、学習内容が難しくなると、理解することに時間がかかっている様子が伺えた。このように、思うようにできないことや、理解が進まない等の経験によって、学習に対する意識が変化した可能性がある。

また、楽しいと思った学習は「今日の漢字」プリント、フラッシュ漢字「読み方編」の2つをあげていた。児童は、「今日の漢字」プリントの表の問題に全て取り組み、3回とも満点を獲得した。プリントの振り返りでは「ヒントを見ないで書けた。」という自己評価をしている。ワークシートの文をつくる課題は2回あったが、2回とも学習した漢字を使って文をつくることができていた。F児は、漢字を使って文をつくる課題を特に積極的に取り組んでいたもので、繰り返しの漢字練習だけでなく、活用課題も合わせて行い、評価を返すことで、今後も漢字学習に取り組むことができると思われる。

### 総合的考察

実践研究より、以下の2点について考察する。

#### 児童の実態把握

漢字の学習についてのアンケート、漢字テスト、漢字練習帳やノート等の観察、学級担任へのインタビューから児童の実態を把握した。アンケートでは、「漢字の学習が好き」「どちらかというが好き」な児童は事前30人、事後27人であり、大きな変化は見られず、実践校の学級では3年生段階において、漢字学習に苦手意識のある児童は少ないことがわかった。ただ、実践後に「漢字の学習が嫌い」へ回答が変化した児童がおり、学習が進むにつれて漢字に苦手意識をもつ児童が今後でてくる可能性もあると言える。学年が上がるにつれて、漢字の難易度も上がっていくことは当然であるから、苦手意識が低いうちに、多様な漢字学習の方法や、親しみ方を知っておくことで、漢字学習を進んで行う児童が増えると考えられる。また、事前事後ともに、33人の児童が「漢字を覚えることは必要」であると感じており、31人の児童が「たくさんの漢字を書けるようになりたい」と思っている。その児童の思いを大切に、多様な漢字の学習方法で漢字の習得を目指すことで、それぞれの児童が学習に取り組むことができると考える。漢字の学習方法については、漢字練習帳で繰り返し書く学習が多いと予想していたが、アンケートによると、児童にとって学習しやすい漢字の覚え方があるようで、様々な方法を用いていることがわかった。

#### 気になる児童に着目した指導・支援の効果

漢字のテスト、漢字練習帳やノートの観察、学級担任が漢字の学習において支援が必要であると判断した児童から、7名を気になる児童とし、実態把握を行った。気になる児童の授業や宿題の様子を観察すると、各児童に苦手なことや、進んで取り組むことのできるものがあった。その実態をもとに、授業と短学習の指導・支援を実践した。

実践後、新出漢字の授業の振り返りでは、①「とても楽しく学習できた」30人、「楽しく学習できた」1人、「あまり楽しく学習できなかった」2人、②「学習した漢字を読むことができる」23人「少し読むことができる」8人、「あまり読むことができない」2人だった。この結果から、一斉指導では理解が進まない児童がいたことがわかる。児童の実態は多様であり、このような児童にどのような支援ができるか考えなければならない。ここでは全員が「わかる」「できる」を感じられる授業には届かなかったが、多くの児童が学習した漢字を読むことができ、楽しく学習できたと答えた。また、へんかつくりの授業で行った漢字パズルは、事後アンケートで「楽しいと思った学習」21人と1番多くの児童が回答していた。どの児童も漢字パズルを3組以上は作成することができており、学習に取り組んでいた。ヒント付きプリントでは、気になる児童も空欄をつくらずに取り組むことができた。学級の様子としては、イラスト漢字を見ながらテストに取り組む児童や、「ヒントはいらなかった。でも実はね、確認のために少し見たんだ。」とヒントを見て見直しを行った児童もおり、漢字が苦手な児童には「ないと困る支援」であり、他の児童には「あると便利で役に立つ支援」であったと言える。以上から、気になる児童の実態をもとにした指導・支援は、学級全体の学習の楽しさや理解の促進に広がりを見せたと思われる。

ここでは、授業では漢字の由来や漢字の表す意味を知る「楽しさ」、短学習では漢字が読める・書ける「楽しさ」を、どの児童も感じられるような学習を目指して取り組みを行った。この学習を目指す上で、実態把握が欠かせないと感じた。児童のレディネスや得手不得手などを把握し、反映させることでより効果的な支援方法を選択できる。

本実践研究では、通常学級に在籍する小学3年生を対象とし、漢字学習につまづきのある児童に着目した漢字の指導と支援の効果について検討することを目的とし、漢字の楽しさやおもしろさを感じ、「できる」を実感することができる学習の実践を行った。期待する結果がでなかった児童もいたが、アンケートでは学級の半数以上の児童が実践後も漢字学習が好きであると回答している。毎日の学習の積み重ねや学習評価によって、児童の学習に対する興味、関心、意欲は変化していくため、今後も漢字学習の早期支援のために、丁寧かつ継続的な児童の実態把握をもとにした指導・支援が求められる。

## 文献

井上賞子・杉本陽子・小林倫代(2008):特別支援教育はじめのいっぽ!:株式会社学研教育みらい

宮内健(2003):小学生の漢字書字学習における組み立て認知方略の有効性について(2)教心第50回総会